

【緑地を楽しむ本】

## 『海に沈んだ故郷』

堀込光子 堀込智之 / 著

連合出版



日本中を震撼させたあの日が、再び巡ってきます。1年もたつのにまだまだ復興の緒にもついているとは言えず、ふるさどに戻れない人や元の日常を取り戻せない人のなんと多いことか。早く暖かい季節が来て、仮設住宅に住む方々、不便な生活を強いられている方々がこの冬の寒さから解放されることを願ってやみません。

考えてみると、日本という国に住む以上、地震による大災害に見舞われる可能性は誰もが等しく持っているのです。もしも災害に遭った時、どのように振舞えるでしょう… 『海に沈んだ故郷』は、石巻市で震災に遭い、現在は仙台で避難生活を送っているご夫婦の著作です。奥さんは小学校教師をしていた方で、避難生活での様子を書き、夫は波の研究者で、巨大津波の現地調査をし、どのようなメカニズムだったのかを解説しています。

最初はのんびりしていたけれど、津波に気づいて大慌てで避難する様子。直後にその場所は濁流

に飲み込まれてしまう危機一髪の状況だったそうです。山の中に孤立していた3日間、禁煙を誓った人のポケットになぜか入っていたライターのおかげで助かった話。泥水で洗われた米を、お寺の鐘(!)を鍋代わりにしておかゆに炊いて1椀ずつ食べた話。「暗くなる前に薪を集めろ!」と叫び、ふらふらになりながらも火の番をする夫の話… どれも、大災害の時に何が大切であるかを教えてくださいます。

また夫はスーパーサイエンスハイスクールやいろいろな実験講師をしているプロの目で、自分が被害を受けた津波の調査をしました。高い波が来て一瞬にのみ込まれてしまった場所が多かった中で、波が比較的低い位置でとどまって被害が少なかった地域もあります。どうしてそのような違いが起こったのか。どのような地形が関係しているのか、探っていきます。

津波のきちんとした知識、災害後の実際の様子を知ることは、次の災害の被害を最小にとどめるために大切なこと、そのような堀込さんご夫妻の信念が伝わってきます。  
(小川)